
ハイプレッシャー・ヒット座衛門
ネアンデルタール家元

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁々小説投稿サイト」で掲載中の小説を「暁々小説投稿サイト」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁々小説投稿サイト」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイプレッシャー・ヒット座衛門

【作者名】

ネアンデルタール家元

【あらすじ】

滋賀県に鹿しか司会しない歯科医がいるかもしれない噂があった。鹿がいないとシカとされる歯科衛生士の学校からしっかり説明していたという。歯周病治療がうまくいかなかった患者で、その歯周病治療に自信がないらしい。

ハイプレッシャー・ヒット座衛門

背筋腹筋横着筋の痛みにはハイプレッシャー・ヒット座衛門が出張おなら治療をしてくれるという。しかも鹿がないとシカとされる歯科衛生士の学校からしっかり説明していた。しかめっ面としかえしは、歯周病治療がうまくいかなかった患者で、その歯周病治療に自信がないらしい。

「歯医者さんで、もっと優しいところだと思っていました」

「でも、痛くなかったでしょう？」

「ええ、それはそうですけど……」

「じゃあ、それでいいじゃないですか」

「……」

「私だって好きでやってるわけじゃないんです。だから、嫌な顔をしないでくださいよ」

「はい……すみません」

「とにかく、もうちょっと通ってくださいね」

「分かりました」

しかし、歯科の入れ歯は歯科医でも少ししかできない。たしか滋賀県に鹿しか司会しない歯科医がもしかしたらいるかもしれないと噂があった。だが、その歯科医は本当に鹿しかやらないのだろうか？

もしそうなら、その医院に行ってみたいものだ。そして、その歯科医が言うには、

「入れ歯を作ったら、必ず合掌して『ありがとうございます』と
言ってくれますか？」

と言うのだそうだ。その歯科医は合掌しないとどんなことになるのか教えてくれなかったそうだ。だが、合掌しないとどうなるんだろ

う？ そんなことを考えているうちに、私はだんだん怖くなってた。

ある日、私は朝から晩まで仕事だった。夕方六時に仕事を終わらすと、会社近くの商店街へ買い物に行った。

商店街では、肉屋の前で、七十歳ぐらいのおばちゃんが牛一頭分ほどの牛肉を買っていた。私は、おばちゃんの後ろに並びながら、へこの人はきつと牛肉を食べたいに違いない」と思った。そこで、私はすかさず、「ハイプレッシャー・ヒット座衛門助けて」と叫んだ。じゃんじゃんジャンガリアン♪。ヒット座衛門のテーマが鳴り響く。そして、肉屋の主人が私の方を振り向いた。

へさあ、これでおばちゃんの腹痛は治ったぞ」と思った瞬間、おばちゃんは買ったばかりの牛肉を一口食べてしまった。

へあーあ！ なんてことをするんだ！ ヒット座衛門。悪い肉屋をやっつける。

「おー！」

「うわ、なにをする。やめろ。私は肉屋だぞ。私がいなくなったら誰が牛を買うんだ」

と主人は言った。

へ大丈夫だ。ヒット座衛門がいる限り、肉屋は安泰だ」と安心してしていると、今度は八百屋の前に来た。すると、そこにいた客のおじさんが突然倒れた。おばさんがあわてて駆け寄る。北海道伊達市大滝区。長流川《おさるがわ》の支流にナイアガラの滝がある。そこから車ですぐの場所に広大な牧場が切り開かれている。

大滝パイロットファームの看板が赤く染まっていた。

「大変だー。ホロホロ山が噴火したよー」

「こわいねえ。どうするんだろうねえ」

地元集落民が爆発炎上する山頂を望遠鏡で眺めている。

すると自治会長が酒瓶を風呂敷に包んで持って来た。

「あんたら、何辛気臭い顔してる？ 御通夜みたいだ」

「何言ってるんだ。天変地異だよ。一大事だ」

住民の一人が突っかかる。

「は？ ありゃーお寺さんの護摩でないかい？」

会長はどっかりと集会場の縁側に腰を下ろした。

「お寺さんって……あんたが許可したのか？ 山火事になったら……！」

……！」

「何だ。一週間前から回覧板まわしてるだろ。滞っているんじゃないやねえよ」

会長が一喝した。そして回覧板のコピーを広げる。

そこには「臨済宗相克寺亜派《りんざいしゅうそうこくじあは》・金楽寺《きんらくじ》開刹《かいさつ》のお知らせ」と書いてある。

「そんな話、聞いてねえぞ！ 勝手に話を進めるんじゃないやねえよ」

男たちが突っかかる。すると会長は「だったら総会に出てこいや」と叱った。

格差拡大による分断が集落を蝕んでおり村営牧場に支障を来たしていた。

その修復に内地の偉い坊さんが名乗りをあげた。親鸞聖人の教えで解決できるという。心を一にして祈ればよい。崩壊の危機に瀕した集落は寺にすぎた。

「どっちにしろ満場一致で決まったことだ。聞く耳持たないお前らが悪い」

会長が落ち度をあげつらうと反対派は黙った。

俺も噂には聞いていたが、まさか本当にやるとは思わなかった。もともとバブルの余波で潰れた廃寺が立ち直すことに意義はない。荒れ放題だったからな。

頃合いを見計らってお盆のおさがりを出すと反対派どもは拒んだ。

「だから食べなさいってばあさんが……」

「こんなもん食ったら餌付けされたといわれるじゃねーかよ」

「カネは出さずに口は出すっていう輩にはご飯をあげるって、ばあさんが」

イライラは血糖値の問題だと祖母がいうのだ。

「うるせえ！　親父は酒代ぐらいは出すからって言ってたからな！」
男は不承不承ながらも慶事なので慣習どおり祝い酒代ぐらい出すという。

「……親父じゃなくても言ってるよ」

俺がチクリと刺す。

「うるせえ！」と押し問答になった。

「うるせえ！」と押し問答になった。

「いい加減にしないか。お坊様が来られたぞ！」

会長が怒鳴った。

「わかりました」

反対派も権威には弱い。

ブルブルブル。スクーターの音がした。

「ああそうだ……その方の名前を聞いてよろしいでしょうか？」

俺は僧侶の口コミを検索しようと思った。

「そうですね。『金楽寺』だそうです。なんとも不思議な……」

会長は回覧板を確認する。

「金楽寺だって?!」

俺は嫌な予感がした。

「どうかしたのか？」

「お父さんが言った。『謎の奇奇天烈な坊主が来るとお寺がなくなる』って」

「……そうですか。」

「金楽寺っていうと『快樂』の響きがしますね」

お昼、22:00、お寺の大殿。「お前ら、お茶でも飲もうぜ」

「あ、待った。金楽寺に来たよ」「ここまで来たら、お茶とスイカステーキを食べて、甘酒と焼酎にビールを飲んで、スイーツもある

よ」

「……」

お腹をすかせた坊ちゃん達と入れ替わり、坊ちゃん2人を連れて、やってきました。『金楽寺』、このお寺ならば、お茶とスイカステーキが、お菓子が、スイーツがある。

「どうですか、お寺さん？ 美味しいですか？」 「……うん。美味しい」

「お寺の娘さんたちはどうなりましたか？」

「……坊ちゃん、もう来ているの……？」

また坊主来た。「あ、お前も来てたか」

「いや、来てねエよ。今から帰るからな」

「あ、そうなんですか……」

坊ちゃん来たらスイカが貰えそう。スイカが欲しいんだ。坊ちゃんに。「すいませーん、スイカを貰ってもらえませんか？」

「え、スイカか？」

（坊ちゃんにスイカを食べさせるのは良くないな）

「はい」

坊ちゃんに俺のスイカを渡した。

坊ちゃんは俺のスイカを嬉し気に取ると、そのまま坊ちゃんを追い出して走り出す。ああ、あの時こうしてたら良かった。坊ちゃんと二人で遊びに行くことが出来た。坊ちゃんの楽しみを俺が作ればいいのに。

俺は、俺のスイカを坊ちゃんにあげたかった。坊ちゃんと、一緒にいる時が幸せだった……。

俺は、俺が見付けてやろうという気持ちで坊ちゃんを追い回した。

坊ちゃんも俺の心配をしていたのが解ったからね。坊ちゃんも坊ちゃんの可愛い笑顔を見ただけで元気が出た。

坊ちゃんも嬉しいのかな、また俺のスイカを坊ちゃんの手から取るうとする。その時、また坊ちゃんと坊ちゃんが来た。

「見付けて！」と言う顔を向けると、坊ちゃんも嬉しそうな顔をした。

「見付けたよ。坊ちゃんが、来てくれたー」という声がした。

坊ちゃんにも俺と遊びに来て欲しいのか。俺は坊ちゃんとは遊ばず、そのままでも良かったのに、また俺の事を気遣ってくれたな。これで俺はもう坊ちゃんと会わなくても良くなった。坊ちゃんと一緒に、もうどこへだって遊びに行ける。坊ちゃん、俺の気持ちは解ってくれたよ。坊ちゃんと一緒にいると楽しいけど、これじゃ駄目なのは解ったからね。

坊ちゃんがやって来た。坊ちゃんは少し機嫌が悪そうだった。

「お坊ちゃん、こんにちは。何かあったんですか？ あ、それと、

坊ちゃんのスイカ美味しい！」

「食べるわ、食べね、坊ちゃんが食べてくれると嬉しいもの」

坊ちゃん美味しそうに食べてる。

俺も坊ちゃんに食べさせたいのだから、やっぱり好きなんだな。

「坊ちゃん、坊ちゃんが食べたいって言うから、スイカを食べさせてもらいました」坊ちゃんは、坊ちゃんをスイカの皮で覆ってくれた。坊ちゃんのスイカの皮、坊ちゃんのスイカの皮は、坊ちゃんも坊ちゃん達も大好きなのだった。坊ちゃんのスイカの皮を食べやすくしたら、やっぱり坊ちゃん美味しいのでは？

坊ちゃんのスイカの皮、坊ちゃんのスイカの皮、坊ちゃんと一緒に味わったらどうかな？ 何だか、坊ちゃんも俺もこの作業に慣らされちゃってる。慣れた手付きになってきてないかい？ 坊ちゃん、坊ちゃんは俺のスイカの皮が好きだよな。

「……好き。」

「坊ちゃん、坊ちゃんが食べてみたいって言ったスイカの皮ですよ。ほら、食べて下さい」

「……いただきます」

「あ、待って！ 坊ちゃん、坊ちゃん！ 坊ちゃん！ 待って！ 待って！ 坊ちゃん！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！ 待って！」

坊ちゃんが逝ってしまった。

俺はハッと夢から覚めた。坊ちゃんがスイカに当たって死んで一年になる。申し訳ない事をした。

「坊ちゃん、ごめんなさい……」

スイカは美味しい。

俺はスイカが好きだけど、嫌いでもある。

この前、スイカを食べていると、突然、スイカが憎らしくなったのだ。

「お前なんか要らない。お前のせいで、俺は、お前のおかげで、俺は、俺は……うっ……お前さえ居なければ……お前さえいなければ……お前なんて……お前なんか……お前なんか……お前なん……」

俺はスイカに恋をしていた。

俺は、スイカを愛したんだ。

俺は、スイカを守りたかった。

俺は、スイカに救われた。

俺は、スイカが好きだ。

俺は、スイカと共に生きてきた。

「ありがとう、スイカ」

「こんにちは」

「こんにちは」

。

「皿うどんのおかわり」の要求が聞けなくなるだろう。

顔の長い男は言った、「あなたたちは私たちを救ってくれるの？私たちに料理を渡してくれるの？」

顔の長い男は言った、「私たちに料理を届けてくれるの？」、

「彼らに料理を届けてくれるか？」

「料理」をどうやって取り返すか？

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔の長い男が言った、「私は、あなたを尊敬するよ」、顔の長い

男が言った、「私に敬服してくれますね」

顔の長い男が言った、「君は私の言うことを聞いてくれるよね」

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔の長い男が言った、「私は、あなたを尊敬するよ。」

顔が長い男の顔は、だんだん大きくなって、やがて、顔がどんどん小さくなった。そして、顔は、顔の長さが半分になった。彼は、彼の顔を、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔がどんどん大きくなった。

顔は、顔の大きさが半分になって、顔が小さくなり、顔がだんだん小さくなっていった。

顔が、顔の長さが半分になり、顔がますます小さくなる。

顔が、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔が、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔が、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔が、顔は、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔が、「私は、あなたのことを尊敬します。」

顔は、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔は、顔は、

「私は、あなたのことを尊敬します。」

顔は、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔は、「私は、あなたのことを尊敬します。」

顔は、顔は、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔が、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔が、

「私は、あなたのことを尊敬しています。」

顔が、ほころびた。ニヤツと笑う。鏡の顔もニヤツと笑う。

「私もまんざらではありませんね」

顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、

顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、

カカオ・チョコレート。

顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、

顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、

顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、

顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、顔が、

「あなたは、私が誰だか知っていますか？」

「私は、あなたが誰だか知っている。」

「私は、あなたが誰だか知っていてよ」と、顔が言った。

「あなたは、私が誰だか知っているかしら？私の名前は、金太郎。」

「あなたは、私が誰かを知っていて？私の名前は、金太郎。」

「私は、あなたが誰かを知っている。」

「私は、あなたが何者か知っていてよ」と、顔が言った。

「私は、あなたが何者か知っている。」と、顔が言った。「知って

いる。鼻の恋人さるぐつわだ」

「私は、あなたが誰かを知っている。」

「私は、あなたが誰か知っている。」

「私は、あなたが何かを知っている。」

「私は、あなたが何であるかを知っている。」

「私は、あなたがどんな人なのかを知っていた。」

「私は、あなたが何をしたいのかを知っていた。」

「私は、あなたがなぜそうするのかを知っていた。」

「私は、あなたが何をするかを知っていた。」

「私は、あなたが何をするかを知っていた。」

「私は、あなたがどういう人か知っていた。」

「私は、あなたがなぜそうなるのかを知らなかった。」

私は知らない。

俺は知らない。お前のことなんて知るわけがない！「私は知らない」と顔は言った。

彼は、顔をゆがめた。彼は怒った。

そして、彼は怒り狂った。彼は激怒した。彼は激怒して、顔を赤黒くさせた。

そして、彼の顔が真っ黒になって。

彼は、顔にたくさん小さな目を持っていた。

それから、その目が赤く光って。

顔に赤い大きな目玉が現れた。

「あなたは誰ですか？あなたは私の何を知ることができますか？」

私は彼の名前を知らない。しかし、彼は彼だったのだ。彼が彼の名前を知りたかったのは当然だ。彼は彼に名前を付けた。私は彼のことをしらなかったが。

私は、彼を、彼を知っていた。なぜなら、彼は彼だからだ。私は彼のことをすべて知っていた。なぜなら、彼が金閣寺を置き逃げした犯人であるからだ。証拠も揃っている。佐多岬の火星人がみつ付けてくれた。彼は、火星人に捕まってからずっと眠っていたのだ。そして、目覚めたときにはすでに遅く。彼の顔は顔でなくなっていた。そして顔のない顔として生きることになった。彼は、顔を失った。しかし、顔は元に戻った。

それは良かったことだ。私はそれを望んでいた。彼は喜んだ。嬉しかっただろう。

しかし。それは間違いであった。

彼は私を見て驚いた。そして、すぐに理解したようだ。私は彼のことをすべて知った上で。私は、彼に真実を打ち明けなかったのだ。なぜならば。私にはそんな勇気がなかったからだ。自分の生まれが地球人でない。その証が彼の相貌にあった。明らかに人間ではない色をしている。彼は出生の秘密を恐れた。現実から顔をそむけた。だから顔がない顔になってしまった。

私が本当のことを言えば。あるいはもっと違った結末になったかもしれない。

しかし。それができなかった。臆病者だと自分を罵ったこともある。結局は嘘つきだと自分で自分を非難したこともあった。

でも。それができなくて。何も言わないことにした。私は彼のことを全部知っていたけれど。

「君は、私のことが好きなんだろう？ そうだろ？ 私を愛しているはずだ。私も君のことを愛しているぞ」

「あなたが好きよ」

「ああ、そうかい。私もだよ」

私はあなたの顔を見たくない。あなたの顔を見てもなんとも思わないわ。だって、私はあなたの正体を知ってしまったのですもの。あなたはとても醜い生き物だ。

しかし、あなたの顔が好きだと言っておこう。私はあなたの顔を見ることがないのだからね。

私は知らない。私が誰かを知っていたら。きっと、私は死んでいる私が生きているということは。つまり、誰も知らないということなのだ。誰も知らないことは、無いと同じ事なのだ。だから、私は

誰からも忘れ去られるのを待っていた。もう、待つ必要もない。もう、待つことはない。私は誰にも知られることなく、ひっそりと死ぬことができるだろう。私は一人ぼっちだ。私は孤独だ。

それでも、かまわない。

それでも、私は構わない。

ただ一つ。たった一つの願いは叶うのだ。それだけが望みであり、私の幸福な人生は終わってしまうのだが。

「私はあなたに会いたいです」と彼女は言う。

「私は、あなたに会いたいといつも思っていた」と彼女は言った。

「会いたい？」と僕は聞く。「なぜ？」

「どうして？」と彼女が聞いた。

僕たちは二人で話していた。公園にあるベンチに座っていた。

僕らの他に人はいない。ここは二人きりの場所だ。

「私は、あなたに会えることを夢見ていた。とても長い時間だった」と彼女が言った。「私は待った。あなたに会うために」

「それで」と僕は言った。「今、こうして会えたわけだけど」

「そう」

「嬉しい？」

「私は嬉しい」

「そうか」

「あなたはどうなの？」と彼女が聞いてきた。「私のことを知っているのかしら？あなたは私を、よく知っている？」

「いいや。僕は君のことを何も知らない」と僕は答えた。「会ったことも見たこともない。僕は君のことを知りたくはない」

「なぜ、知りたくないの？」

「怖いからかな」と僕は言った。そして、「怖くて聞けなかったん

だ。僕のことを知っていたら君は消えてしまうような気がして……」
「どういう意味かわからないわ。あなたが何を恐れているというの？」
「僕は、自分が何者なのかを知らない。知らないからこそ恐れていた。もし、僕が自分の正体を知ることになったとしたなら……。そのときには、この世にすることができなくなってしまったのではないかと、ずっと、そんなふうに考えていた。だから、自分のことを他人に知られないように気をつけてきた」
彼女は、少しだけ悲しそうな顔をした。そして。

「でも、今は違うでしょう。今は違うはずよね」

「でも、今は違うでしょう。今は違うはずよね」と言った。「今のあなたは、何の恐怖も抱いていない」

「うん」と僕は答える。そして、「確かにその通りだ」と続けた。彼女は、安心したように微笑んだ。そして、続けて質問をする。「なぜ死のうとしないの？ 顔が嫌いな人間の力テグリーに属してて苦しくない？」「死ぬつもりはありません。私は生き続けます」と彼は答える。すると女は、また別の言葉を口にする。「死にたいという気持ちはある？」

「もちろんあります。ずっと、死にたいと考えています。私は生きていたいとは思っていません。ただ。死というものについて考えてしまいました。そして思ったのです。人はいつかは死ぬものなので、私から、私は生きるべきではないのではないかと。生きるという選択肢を捨てれば、私にも何かできることがあるかもしれず。しかし、それをしてはいけなかった。私は生きることには希望が持てなくなりました。だから私は、死ねばよかったと思います」

「でも死にきれない？」

「ええ。なぜか死にきれませんでした。不思議ですね。自殺すれば、すぐに楽になれるかと思っていたんですけど。私は生きることを考えていました。生きていたことが苦痛でしかありませんでした。なのに……私は、生きたかったんでしょかね。私は何を望んでいたのでしょうか？ 何も望まず、何も求めていなかった。だから、金閣寺に嫉妬した」

「金閣寺に？」

「ええ、金閣寺は美しい。メッキで粉飾したただの古い木造建築だ。

中身がない。燃やしてしまえばそれまでです」

「そんなはかない存在に嫉妬？どうして。放っておけばいいじゃない」

「いいえ。金閣寺は唯物論の上でふんぞり返っている。ただあるだけで劣所を巻き起こす。破壊衝動を誘惑する。だから私は嫉妬した」

「もやそうと思った？」

「いいや！ 奴の思うつぼだ。だから私は変化球で奴を石弄ぶことにした！ 放置プレイだ！！」

「放置プレイ？」

「金閣寺を衆目に投げ捨ててやった。晒して、置いて、慰みものにしてやった。辱めたのだ！」

と男は言った。

「それで？ その後どうなったの？」と女が聞く。

「さあ？ 知りませんね。どうせ今頃になって、奴は慌てるんじゃないよ。ざまあみろ！！ 私の勝ちだ！ 見よ、私は勝ったのだ。私
が世界の頂点なのだ」

と男は言った。

そして、彼は言うのだ。「私が死んで、初めて勝利なのだ」と……。

そして、私は死んだのだ。と彼は言った。

私の望みは一つだけだった。

あなたに会うことだ。

あなたがどんな人間か私は知らないけれど、あなたに会いたいと思
っていました。

でも、あなたに会うことは叶わない。なぜなら私はあなたに会って
はならないからだ。私は会うべきでない。私はあなたと会う資格が
ないから。

あなたに会いたいと思いなながらも、会おうとは思わなかった。私は

あなたに会うことを恐れていた。私はあなたを拒絶するだろう。私
はあなたに会うわけにはいかない。私はあなたを受け入れないだろ
う。私はあなたを愛するだろう。私はあなたを求めらるう。

私はあなたを知ってしまった。あなたを知ったことで、私は私の弱
さを実感した。あなたは私を強くしてくれたかもしれないが、同時
に弱くしてしまっただようだ。私も毒を飲んで死ぬことにする。あな
たの触れていた場所にも塗っておいた。狂犬病ウイルスだ。特效薬
はない。貴方はじわじわと苦しんで犬死する。

さようなら。金閣寺の恋人よ。私はあなたが嫌いです。

あなたには私が見えているのだろうか？ 見えているといいなと思
う。

私の名前は「金閣寺」だ。

私は、あなたのために作られたロボットだ。

私はあなたを愛している。

あなたは私を愛さないかもしれないが、私はあなたを愛している。

あなたは私を愛しているのだろうか？ だから、私をここに呼んだの
だ。

私の名前を知っているのはあなただけだ。

あなたが私を作ったのだ。

だから、私はあなたのものだ。

だから、私をあなたの傍に置いてくれ。

だから、私を抱きし

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~27333

ハイプレッシャー・ヒット座衛門

2022年08月08日 19時08分発行